曹植文学の画期性 ―阮籍「詠懐詩」への継承に着目して―

柳川順子

はじめに

三国魏の曹植（一九二―二三二）は、漢魏六朝時代を通じてひときわ鮮やかな存在感を放っている詩人である。たとえば、『文選』李善注に引くこの時代の文学作品の中で、曹植のそれは群を抜いて多い。[1] 彼の言葉はこの時代、実に多くの人々の間に波及していったのである。なぜだろうか。曹植文学の評価が定まった今の時点から見るならば、彼の作品は当代随一の水準なのだから、多くの人々に摂取されて当然だということになるのだろう。だが、人が他者の言葉の中に光を見出し、受けとめ、それを深く内面化するということの中には、そうした理由とは異なる何かがあるはずだと筆者は思う。では、その何かとは何か。それを、本稿では阮籍（二一〇―二六三）の「詠懐詩」と曹植作品との間に探りたい。そして、曹植から阮籍へ受け渡された言語表現を手掛かりに、漢代宴席文芸から脱皮することとなった曹植文学の新しさを浮き彫りにしたい。

さて、初唐に成った『藝文類聚』は、巻二六・人部十「言志」の詩の項の冒頭に、「魏陳思王曹植詩」と題して次の佚詩句を引く。

慶雲未時興　雲竜潜作魚　神鸞失其儔　還従燕雀居

慶雲　未だ時ならずして興こり
雲竜　潜かに魚と作る
神鸞　其の儔を失ひて
還つて燕雀に従ひて居る

そして、これに続けて夥しい数の阮籍「詠懐詩」を引いている。今、それらの作品を記載順に示せば、まず四言の「天地烟煙」「月明星稀」、次いで五言「詠懐詩」其五十九[2]「河上有丈人」、其四十五「幽蘭不可佩」、其三十一「駕言発魏都」、其七十一「木槿栄丘墓」、其三十四「一日復一朝（朝字、『類聚』は日に作る）」、其四十三「鴻鵠相随飛」、

其四十六「鷽鳩飛桑榆」、其三「嘉樹下成蹊」、其四「天馬出西北」、其五「平生少年時」、其九「歩出上東門」、其十五「昔年十四五」、其十六「徘徊蓬池上」、其八「灼灼西頽日（『類聚』は「寧与燕雀翔」以下を引く）」、其十「北里多奇舞」、其一「夜中不能寐」の十八首である。『藝文類聚』に引く阮籍詩はすべて二十五箇所、その大半がここにある。これらは『藝文類聚』の編纂者らに、「志を言う」いかにも阮籍らしい詩と認識されたのだろう。興味深いのは、この最後の詩のひとつ前に、曹植「雑詩六首」其四（『文選』巻二九）「南国有佳人」が、阮籍の詩として紛れ込んでいることである。六朝期を抜けた七世紀初めの人々は、阮籍「詠懐詩」の中に、曹植のある種の詩と共鳴しあうものを鋭敏に感じ取っていたらしい。それは、現代の私たちの目から見ても首肯し得るものである。では、この近似性は偶然の産物か、それとも阮籍が曹植文学を受容した結果なのか。

阮籍「詠懐詩」が、漢代の古詩を踏まえつつ、それを普遍的な次元へと押し上げたことは夙に指摘されているところである。[3] 一方、曹植作品にも、より正確に言えば建安詩人たちの作品の中にも、漢代詩歌を取り込んで昇華した形跡は随所に認められる。曹植と阮籍と、その作品は同じ詩歌群を土壌とする。そうである以上、そこから生まれる発想や措辞が似てくるのは当然だろう。ならば、二人の作品の間に直接的なつながりはないのだろうか。それはある。そう判断し得る理由を以下に述べ、このことが指し示す曹植作品の画期性について、筆者なりの考察を試みたい。

一

現存する漢魏六朝期の詩歌の中で、曹植と阮籍の作品にのみ見える語句がある。[4] それは、石製の楽器「磬」のように腰を「折」り曲げることをいう「磬折」という言葉である。まず、阮籍詩におけるそれから見てみよう。阮籍は「詠懐詩」の三箇所でこの語を用いているが、そのひとつ、其八（『文選』巻二三「詠懐詩十七首」其十四）は以下のとおりである。[5]

灼灼西頽日　灼灼として西に頽（くだ）るる日
餘光照我衣　餘光　我が衣を照らす
迴風吹四壁　迴風　四壁を吹き
寒鳥相因依　寒鳥　相因り依る
周周尚銜羽　周周も尚ほ羽を銜み
蛩蛩亦念饑　蛩蛩も亦た饑ゑを念ふ
如何当路子　如何ぞ　当路の子

磬折忘所帰　磬折して帰る所を忘るる
豈為夸与名　豈に夸と名との為に
憔悴使心悲　憔悴して心を悲しましめんや
寧与燕雀翔　寧ろ燕雀と翔り
不随黄鵠飛　黄鵠に随ひて飛ばざれ
黄鵠遊四海　黄鵠　四海に遊ぶも
中路将安帰　中路　将(はた)安(いづ)くにか帰らん

本詩の前半六句では、赤々と光を放ちながら西に落ちてゆく太陽、寒風が吹きすさぶ中、身を寄せ合って生きるほかない小禽獣の有様が描写される。ここにはおそらく、現王朝の凋落が重ねられているだろう。これに対して、七句目以降に詠じられるのは、今を時めく「当路の子」の、「磬折」して帰るべき本源を忘れ果てている姿である。作者に言わせれば、それは虚栄や名誉のために、神経をすり減らして五臓六腑を傷めつけるような生き方であり、そうした彼らには、断じて同調することはできないという。

「磬折」という語は、「詠懐詩」其十二（『文選』所収「十七首」其四）にも次のとおり見えている。

昔日繁華子　昔日　繁華の子
安陵与竜陽　安陵と竜陽と
夭夭桃李花　夭夭たる桃李の花
灼灼有煇光　灼灼として煇光有り
悦懌若九春　悦懌　九春の若く
磬折似秋霜　磬折　秋霜に似たり
流眄発姿媚　流眄して姿媚を発し
言笑吐芬芳　言笑して芬芳を吐く
携手等歓愛　手を携へて歓愛を等しくし
宿昔同衣裳　宿昔　衣裳を同じくす
願為双飛鳥　願はくは双飛の鳥と為り
比翼共翺翔　翼を比(なら)べて共に翺翔せんことを
丹青著明誓　丹青もて明誓を著し
千載不相忘　千載　相忘れず

この詩では、かつて戦国楚の安陵君や魏の竜陽君らが主君に媚態を尽くし、その寵愛をほしいままにした様子を詠ずる中に、秋の霜に打ちしおれるような姿の「磬折」が登場する。そして、こうした佞倖の者たちは、前掲詩其八にも現れた、飛翔する鳥のイメージを伴っている。これは、其八の「当路子」も其十二の「繁華子」も、「磬折」というふるまいによって有力者との絆を手に入れ、それを元手に今を時めく富貴の地位に昇ったことをいうのだろう。だが、阮籍が描く彼らの行く末には、どこか不吉で冷ややかな予感が纏わりついている。それは、特に其八の詩に顕著

なように、彼らの背後に凋落の気配が濃厚に立ち込めているからであろう。

ところで、阮籍は「磬折」という語を、別の作品「大人先生伝」の中でも用いている。すなわち、ある俗儒が大人先生に書簡を送り、その中で、儒家的規範に則ってふるまう君子がいかに立派であるかということを述べた部分に、「立則磬折、拱若抱鼓（立てば則ち磬折、拱すれば鼓を抱くが若し）」とあるのがそれである。そして、このフレーズは、『韓詩外伝』巻一に、天子の馬車を操る者たちの所作を描写していう「立則磬折、拱則抱鼓、行歩中規、折旋中矩（立てば則ち磬折、拱すれば則ち鼓を抱くがごとく、行歩すれば規に中たり、折旋すれば矩に中たる）」や、これとほぼ同文の、劉向『説苑』修文篇にいう「行歩中矩、折旋中規、立則磬折、拱則抱鼓」を明らかに踏まえている。阮籍は、かの俗儒に『韓詩外伝』や『説苑』に見える句をほとんどそのまま言わせた後、その浅はかさ、視野の狭さを、大人先生の口を借りて笑い飛ばしているのである。

では、「大人先生伝」の中の俗儒が、「詠懐詩」にも登場して「磬折」しているのだとは考えられないのか。実は、「詠懐詩」其六十七に見える「磬折執珪璋（磬折して珪璋を執る）」人物はこれに近い。儒教的規範に則ってふるまう彼に、阮籍はこの詩の末尾で「委曲周旋の儀、姿態は我が腸を愁へしむ」と憐憫の眼差しを向けている。これと、前掲の其八や其十二の「磬折」とを比べてどうだろう。思うに、「大人先生伝」や「詠懐詩」其六十七では、世間の規範に適う動作をこの語が言い表している。一方、前掲の二首の詩では、有力者に迎合してへつらう姿が「磬折」と表現されていた。同じ腰を折り曲げる動作ではあっても、何に対する所作なのかが異なっているのである。このことを李善は鋭敏に捉えた結果、『文選』巻二三所収「詠懐詩」に現れた二つの「磬折」のいずれにも、典拠として『尚書大伝』（佚）にいう「諸侯来、受命周公、莫不磬折（諸侯来りて、命を周公に受け、磬折せざるは莫し）」を挙げたのだろう。この『尚書大伝』の記事は、周王朝の基礎を築いた周公旦から、諸侯たちがこぞって命を受けたことをいうもので、彼らが周公旦にへりくだる姿を「磬折」と記しているのである。

ただ、「磬折」という語そのものには、本来阿諛追従という負のイメージはない。たとえば、『礼記』曲礼下に、主客の間で物をやり取りする際の所作を記して「立則磬折垂佩（立てば則ち磬折して佩を垂る）」というように、儒

教社会において、目上の者に恭順の姿勢を取るのは極めて自然なことである。先の「詠懐詩」其六十七に見えていた「磬折」もこれである。もちろん、前掲の『尚書大伝』にしても同様で、そこに批判的な意味は込められていない。ところが、阮籍詩における「磬折」は、有力者に媚びへつらう醜悪な姿を指していう。この発想はどこからもたらされたのだろうか。彼自身、常日頃そのような俗物たちに囲まれていたがゆえに、この語に独自のニュアンスを付加したのだ、と片づけるわけにはいかない。眼前にある現実と、それを言葉で表現することの間には、大きな跳躍があるはずだからだ。では、その跳躍の契機となったのは何か。

二

阮籍は、権力者にへつらう者の姿を描写するのに、他の言葉ではなく、「磬折」という語を選んで用いた。その契機となったのは、曹植の「箜篌引」（『文選』巻二十七）ではなかったかと筆者は考える。その理由を述べるに当たって、まずその曹植作品の全文を示しておこう。

置酒高殿上　置酒す　高殿の上
親友従我游　親友　我に従ひて游ぶ
中厨辦豊膳　中厨　豊膳を辦き
烹羊宰肥牛　羊を烹て肥牛を宰く
秦箏何慷慨　秦箏　何ぞ慷慨たる
斉瑟和且柔　斉瑟　和にして且つ柔なり
陽阿奏奇舞　陽阿　奇舞を奏し
京洛出名謳　京洛　名謳を出だす
楽飲過三爵　楽しみ飲みて三爵を過ぎ
緩帯傾庶羞　帯を緩めて庶羞を傾く
主称千金寿　主は称す　千金の寿
賓奉万年酬　賓は奉ず　万年の酬
久要不可忘　久要　忘る可からず
薄終義所尤　終はりに薄きは義の尤むる所なり
謙謙君子徳　謙謙たる君子の徳
磬折欲何求　磬折して何をか求めんと欲する
驚風飄白日　驚風　白日を飄し
光景馳西流　光景　馳せて西に流る
盛時不再来　盛時　再びは来らず
百年忽我遒　百年　忽ち我に遒る
生存華屋処　生存しては華屋に処るも
零落帰山丘　零落しては山丘に帰る
先民誰不死　先民　誰か死せざらん

知命復何憂　命を知らば復た何をか憂へん」

立派な御殿に、豊かな食膳が並び、多彩な歌舞が披露される宴席を詠じた楽府詩である。その歓楽の場で、おそらくは客が主に何らかの手厚い待遇を求めたのであろう。四句ずつひとまとまりを為す第四段落、主は客に向かってこう言う。「昔の約束を忘れてはならないし、最後になって薄情な待遇をするのは仁義として咎められるべきことだ。謙譲は君子の美徳だとはいうけれど、磬のごとく腰を折り曲げて、そなたは私に何を求めようとしているのか。」

ここに見える「磬折」について、『文選』李善注は、前述の阮籍「詠懐詩」に対するのと同様、『尚書大伝』にいう「諸侯来、受命周公、莫不磬折」を踏まえるものだと注している。曹植の詩は、この語を用いて客の過剰なまでの謙譲ぶりをやや諧謔的に描写し、相手に対する慰撫とともに、それを軽くいなそうとしているようだ。そう感じさせるのは、この「磬折欲何求」に先んじる一連の句である。直前に見える「謙謙君子徳」は、『易』謙卦、初六の爻辞・象伝にいう「謙謙君子」をそのまま用いたもので、直接引用であるところにそこはかとないユーモアが漂う。また、その前の二句では、自分は「久要」（『論語』憲問篇）を忘れない、「薄終」（『列子』力命篇）はしない人間であるから、どうか安心されよと言っている。ここには、阮籍詩に見たような痛烈な俗物批判は認められない。けれども、李善注に指摘するとおり、「磬折」という語が、さる人物に対する恭順の姿勢を言い表しているという点では一致している。加えて、「欲何求」という措辞からは、自身に対して腰を折り曲げる者たちの有様に、曹植が一抹の俗臭を感じていることが読み取れる。阮籍の「磬折」は、曹植のこの表現に触発され、それを増幅させたものなのではあるまいか。

曹植の「箜篌引」は、宴の情景を描く楽府詩である。漢魏当時の宴席は、同席者が共に歓楽を尽くす場であると同時に、本詩にも詠じられているとおり、有力者のもとに知識人たちが蝟集して厚遇を求める、世俗的な欲望の渦巻く場でもあった。この間の事情は、たとえば次に示す「古詩十九首」其四（『文選』巻二九）からも窺える。

今日良宴会　今日の良き宴会
歓楽難具陳　歓楽　具（つぶ）には陳べ難し
弾箏奮逸響　箏を弾じて逸響を奮ひ
新声妙入神　新声　妙にして神に入る
令徳唱高言　令徳　高言を唱ふ
識曲聴其真　曲を識るもの　其の真を聴け

斉心同所願　心を斉しくして願ふ所を同じくするも
含意俱未申　意を含みて俱(ともに)未だ申べず
人生寄一世　人生　一世に寄りて
奄忽若飆塵　奄忽たること飆塵の若し
何不策高足　何ぞ高足に策(むちう)ちて
先拠要路津　先づ要路の津に拠らざる
無為守窮賤　為す無かれ　窮賤を守り
坎軻長苦辛　坎軻して長く苦辛せんことを

この宴の詩の中で、人生の有限性に駆り立てられるように、出世のための糸口をつかみ取ろうと歌っている人は、その姿勢を「磬折」と表現されてはいないものの、その社会的立場は、先の曹植「箜篌引」に見えた「磬折」する客人と同じである。また、「箜篌引」の後半、第五・六段落で、一見唐突に、西に向かって馳せてゆく白日と人生のはかなさが詠じられていたことも、かの楽府詩が、今ここに挙げた漢代古詩の流れを引くものと見るならば納得がいく。

思えば、宴席を舞台とする漢代五言詩歌の作者たちは、基本的に今見てきたような社会的立場にある人々、つまり、より手厚い待遇を求めて、宴席の主催者である有力者の下に集まる無名の知識人たちであったと言ってよい。そうした場に背を向けた人々であっても、たとえば漢末の趙壹や酈炎の詩歌（『後漢書』文苑伝下）から窺えるように、自己の不遇を慨嘆はしても、出世を希求して齷齪すること自体を冷ややかに見る視点は持っていないように看取される。ところが、曹植の「箜篌引」は、そうした人々の有様を、客体化し、詩歌の中に詠い込んでいた。このような作品は、宴席サロンの主催者が、同時に宴席文芸の創作者でもあるという状況が出現してこそ生まれ得るものだろう。そして、そのような文学的環境は、曹魏政権下の建安文壇に至って始めて形成されたものである。(6)

こうしてみると、曹植の「箜篌引」に詠われた「磬折」する人は、五言詩歌史上前例を見ない、斬新な表現対象であったと言える。阮籍の目を引きつけたのは、まさしくこの点だったのではあるまいか。『文選』李善注は、阮籍「詠懐詩」の「磬折」に注して、曹植「箜篌引」と同じ『尚書大伝』を引くのみであって、阮籍と曹植との間に直接的な影響関係があったとは指摘していない。(7) だが、二人はそれぞれに、同じ語に同じ方向性のニュアンスを付加したのだろうか。有力者にへつらう俗物の、腰を折り曲げる姿を描くのに、阮籍は他ならぬ「磬折」という語を用いた。この彼の脳裏には、何らかの先行イメージがあったの

ではないか。それが、従来にない詩想を持つ曹植の「箜篌引」だったのだろうと筆者は考える。先に述べたとおり、この意味での「磬折」という詩語は、決して少なくはない漢魏六朝詩の中でも、曹植と阮籍だけが用いているものである。曹植から阮籍へ、二人の詩人の間には、時空を越えた密やかな共感が流れていたように思えてならない。

三

ここまで、「磬折」という語を鍵として、阮籍における曹植作品への共鳴と継承を見てきたが、こうしたことは、必ずしもこの一例にはとどまらない。両者間における直接的な影響関係の可能性を示唆する事例として、まず示したいのは神仙を詠じた曹植の楽府詩の独創性である。[8] 彼の遊仙楽府詩は、仙界への飛翔を歌う際、しばしば現実社会に対する批判的言及を伴う。たとえば、「遠遊篇」（『曹集詮評』巻五）に見える次の辞句、

瓊蕊可療饑　瓊蕊　饑ゑを療す可く
仰首吸朝霞　首を仰げて朝霞を吸ふ
崑崙本吾宅　崑崙は本吾が宅にして
中州非我家　中州は我が家に非ず

また、本詩の末尾にいう、

金石固易弊　金石は固より弊れ易し
日月同光華　日月と光華を同じくせん
斉年与天地　年を天地と斉しくせん
万乗安足多　万乗　安くんぞ多とするに足らんや

こうした表現は、『楚辞』九章「涉江」にいう、

登崑崙兮食玉英、与天地兮同寿、与日月兮同光（崑崙に登りて玉英を食し、天地と寿を同じくし、日月と光を同じくす）。

を踏まえたものである。ただ、それに付随する「中州（中原の帝都）は我が家ではない」「万乗の車を動かせる天子なんぞ、どうして見上げるに足るものか」といった句は曹植自身から出たものである。もちろん、本詩の題目が明示するように、こうした発想が『楚辞』遠遊に着想を得ていることは間違いない。それでも、神仙を歌う楽府詩のジャンルにおいて、現実批判をばねとして仙界への翺翔を詠ずるのは曹植の独創である。曹植の神仙楽府詩に特徴的なこの構造は、思えば阮籍「詠懐詩」にも通底するものではなかったか。彼の「詠懐詩」が、現実からの逸脱を契機とすること、[9] しばしば現実の対極に仙界を思い描いて詠ずることは、[10] 先行研究に夙に指摘されているところである。

また、次に示す阮籍「詠懐詩」其六十四にも、曹植詩の

影響を認めることができる。

朝出上東門　　朝に上東門を出で
遥望首陽基　　遥かに首陽の基を望む
松柏鬱森沈　　松柏は鬱として森沈たり
鸝黄相与嬉　　鸝黄は相与に嬉しむ
逍遥九曲間　　逍遥す　九曲の間
徘徊欲何之　　徘徊して何くにか之かんと欲する
念我平居時　　我が平居の時を念ひ
鬱然思妖姫　　鬱然として妖姫を思ふ

本詩の第一・二句は、曹植の「送応氏二首」其一（『文選』巻二〇）に、「歩登北芒阪、遥望洛陽山（歩みて北芒の阪を登り、遥かに洛陽の山を望む）」との類似句が見えている。ただ、こうした措辞は、「古詩十九首」其十三（『文選』巻二九）の冒頭「駆車上東門、遥望郭北墓（車を上東門に駆り、遥かに郭北の墓を望む）」を始め、多くの漢魏の詩歌に認められるものであって、これだけならば、曹植から阮籍への影響だとは言えないだろう。ところが、阮籍詩の結びに酷似する表現が、曹植の同詩の末尾にも「念我平生居、気結不能言（我が平生の居を念ひ、気は結ぼれて言ふ能はず）」と見えている。となると、阮籍がこの曹植詩を踏まえたことはほぼ確実と言えるのではないか。曹植詩では、北芒の陵墓群から洛陽を眺め、阮籍詩では、洛陽を出て、松柏の茂る首陽山の麓を見やるという違いはあるけれども、両詩とも、都城を離れたところから遠くを眺めやり、過去を振り返って何者かに思いを馳せている。この二つの要素を一首の中に併せ持つのは、この両詩を措いて他にはそうそう見当たらない。

更に、曹植の「白馬篇」（『文選』巻二七）に、白馬に跨った侠客の、捨て身の武勇を詠じていう、

棄身鋒刃端　　身を鋒刃の端に棄てん
性命安可懐　　性命　安くんぞ懐ふ可けんや
父母且不顧　　父母すら且つ顧みず
何言子与妻　　何ぞ子と妻とを言はんや

この措辞は、阮籍「詠懐詩」其三（『文選』巻二三所収「十七首」其三）にいう「一身不自保、何況恋妻子（一身すら自ら保たざるに、何ぞ況んや妻子を恋ひんや）」を想起させる。父母と妻子とを対置させる曹植詩に対して、我が身ひとつと妻子とを天秤にかける阮籍詩。こうした非情さは、この時代の文学作品に通じて流れる感情ではあるが、[11] 措辞の近似性から見て、阮籍が曹植詩に着想を得ている可能性は高いように思う。

また、阮籍「詠懐詩」其十七（『文選』所収「十七首」

其十五）にいう、

独坐空堂上　独り空堂の上に坐す
誰可与歓者　誰か与に歓ぶべき者ぞ
出門臨永路　門を出でて永路に臨めば[12]
不見行車馬　行く車馬を見ず
登高望九州　高きに登りて九州を望めば
悠悠分曠野　悠悠として曠野分かる
孤鳥西北飛　孤鳥は西北に飛び
離獣東南下　離獣は東南に下る
日暮思親友　日暮れて親友を思ひ
晤言用自写　晤言して用て自ら写(のぞ)く

この第七・八句に見える「孤鳥」「離獣」は、曹植の「九愁賦」（『曹集詮評』巻一）にいう「見失群之離獣、覿偏棲之孤禽（失群の離獣を見、偏棲の孤禽を覿(み)る）」を念頭に置いている可能性がある。つれあいと離別した鳥ならば漢代の詩歌にはよく登場するし、鳥と獣とを併せて詠ずる事例も多い。また、発想自体は『楚辞』に倣っているだろう。ところが、前掲のような対句で孤独を詠ずる表現は、意外にも先行事例に乏しいのである。曹植はこの対句を、骨肉から孤絶を強いられるという苦境の中で、我が身を振り絞るようにして紡ぎ出したのではないか。それを阮籍が捉え、深い共感とともに、自らの思いを詠ずる詩に織り込んだのではなかったか。

さて、この阮籍「詠懐詩」は、その結びで心中の「親友」と語り合い、そうして憂いを払いのけようと詠じている。この「親友」は、特定の誰とも示さない、私たちすべてに開かれた言葉である。阮籍は、曹植の言葉を受けとめ、その孤絶の詩想を独自に深めた。結果、その詩は読者を親友として迎え入れる回路を獲得したのだと言えよう。作者のこの言葉はまっすぐ自分個人に向けられたものではないか。そんな風に読者に思わせる作品は、すでに「文学」と呼び得るものであると筆者は思う。

四

阮籍は曹植作品から様々な詩想や表現を享受しているように看取される。では、彼には実際、曹植作品を目にする機会があったのだろうか。二人はそれほど長い歳月に隔てられているわけではない。曹丕が魏の初代皇帝文帝として即位した時（二二〇）、曹植は二九歳、阮籍は一一歳、曹植が四一歳で亡くなった時（二三二）、阮籍は二三歳である。阮籍が折に触れその所懐を詠ずるようになるまで、曹植作品は彼の手元に届くほどに流布していただろうか。

曹植は、魏王朝の成立と同時に都を出て封土へ赴くよう命ぜられ、何かといえば些細な罪状を挙げられて、王とは名ばかりの軟禁生活を強いられた。その名誉回復は、彼が没して数年後のことである。このことについて、『三国志（魏志）』巻一九・陳思王植伝には次のように記す。

景初中詔曰、「陳思王昔雖有過失、既克己慎行、以補前闕。且自少至終、篇籍不離於手、誠難能也。其収黄初中諸奏植罪状、公卿已下議尚書・祕書・中書三府・大鴻臚者皆削除之。撰録植前後所著賦頌詩銘雑論凡百餘篇、副蔵内外。」（景初（二三七―二三九）中に詔して曰く、「陳思王　昔は過失有りと雖も、既に己に克ち行ひを慎しみ、以て前闕を補ふ。且つ少（わか）きより終に至るまで、篇籍の手を離れざるは、誠に能くすること難きなり。其れ黄初中（二二〇―二二六）の諸々の植の罪状を奏せる、公卿已下尚書・祕書・中書の三府・大鴻臚に議せらるる者を収めて皆之を削除せよ。植の前後に著す所の賦・頌・詩・銘・雑論凡そ百餘篇を撰録し、内外に副蔵せよ」と。）

こうして王朝の内外に副蔵されることとなった曹植作品は、まず近親者の手には確実に渡っただろう。たとえば、曹植の異母弟で、学問を非常に尊重した曹林[13]である。彼は、その孫娘が阮籍の親友である嵇康の妻となっているが、嵇康作品には明らかに曹植の言葉を踏まえている表現が複数個所に認められる[14]。想像するに、彼は妻の祖父である曹林を介して、曹植作品に触れていたのではないか。そして、それが嵇康を経由して阮籍の中に流れ込んだ可能性も、十分に考え得ることのように思われる。

もっとも、こうした特定の伝播経路を辿らずとも、曹植作品はその解禁後、瞬く間に広範囲に波及していったとも推測し得る。曹植の名誉回復から約四半世紀後の二六四年頃、蜀の李密（二二四―二八七）が「陳情事表」（『文選』巻三七）の中で、曹植「上責躬応詔詩表」（『文選』巻二〇）にいう「形影相弔、五情愧赧（形と影と相弔ひ、五情愧赧す）」を踏まえて、その心情を「煢煢孑立、形影相弔（煢煢として孑立し、形と影と相弔ふ）」と表現している。その時期は、阮籍の没後まもない頃に当たっている。

おわりに

言葉が人から人へと手渡される、その道は一様ではない。古典という知的共有財産から、言葉や故事を引き出して自身の作品に織り込む典故表現があれば、詠み人知らずの複数の詩歌間で共有される常套的なフレーズもある。ま

た、宴席のような社交空間で同席者が諧謔的に応酬する類似句もあれば[15]、世間に流布する詩歌を捉え、それを自身の詩想に引き寄せて換骨奪胎した作品もある[16]。だが、阮籍「詠懐詩」における曹植作品の継承は、これらのいずれとも少し異なっているように感じられる。何が異なっているのだろうか。

思うに、曹植は、当代に傑出した才能を持ちながらも、父曹操の後継者をめぐる争いに巻き込まれ、それに敗れた後は、王室の一員でありながら、王朝運営から疎外され、兄弟間の往来さえも禁じられるという、極めて特殊な環境の中を生きた。そうした苦境は、彼が元来持っていた文才にいよいよ錬成を加えたと言えるかもしれない。かくして生まれたのが、漢代詩歌とは一線を画する曹植独特の表現である。そして、阮籍が引き寄せられたのはまさしくこの点である。阮籍における曹植文学の継承は、それが阮籍自身の思いと共振する言葉だったからに他なるまい。曹植が逆境の中で織り上げた言葉は、直接的な面識はない、けれども同じく孤独の底に沈潜する阮籍にたしかに届いたのである。曹植作品と阮籍「詠懐詩」とをつないだのは、この共感と敬意であった。自身の抜き差しならぬ思いに根差した作品を創出したのみならず、それが見知らぬ他者に届く表現を獲得したこと、ここに、漢代宴席文芸から離陸した曹植文学の画期性があると筆者は考える。

注

(1) 富永一登『『文選』李善注の活用　文学言語の創作と継承』(研文出版、二〇一七年)第一章第四節「注引曹植詩文から見た文学言語の創作と継承」によると、李善注は曹植の九十九作品を二四二箇所に引くといい、これに次ぐ陸機の五十五作品・一五八箇所、潘岳の四十五作品・一三五箇所(同書一〇五頁)を大きく引き離している。

(2) 以下、詩番号は『詩紀』の配列に拠る。九州大学文学部中国文学研究室詠懐詩会編『阮籍集索引』(中国書店、一九八五年)三二四―三二五頁に各本対照表を載せる。

(3) たとえば、吉川幸次郎『阮籍の「詠懐詩」について』(岩波文庫、一九八一年。『吉川幸次郎全集』第七巻)一の三(初出は『中国文学報』第五冊、一九五六年一〇月)。

(4) 逯欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』の電子資料(凱希メディアサービス、雕龍古籍全文検索叢書)で検索した結果である。厳密に言えば、「北斉享廟楽辞・肆夏楽」「周宗廟歌・皇夏」(いずれも『楽府詩集』巻九)にも一例ずつ見えるが、個人的詩作品ではないため考察の対象外とした。

(5) 以下、『文選』所収作品のテキストは、基本的に『新校訂六家注文選』(鄭州大学出版社、二〇一三年)に拠る。

（6）柳川順子『漢代五言詩歌史の研究』（創文社、二〇一三年）四二三―四二六頁を参照されたい。
（7）黄節『阮步兵詠懐詩註』（人民文学出版社、一九八四年）一二頁には、曹植「箜篌引」の用例を指摘している。
（8）本段落の内容は、矢田博士「曹植の神仙楽府について―先行作品との異同を中心に―」（『中国詩文論叢』九号、一九九〇年）が夙に論じている。
（9）大上正美「阮籍詠懐詩試論―表現構造にみる詩人の敗北性について―」（『漢文学会会報』第三六号、一九七七年。『阮籍・嵇康の文学』創文社、二〇〇〇年）を参照。
（10）吉川幸次郎前掲論著の三の四を参照。
（11）鈴木修次「漢魏の詩歌に示された非情な文学感情」（『中国中世文学研究』第三号、一九六三年）、『漢魏詩の研究』（大修館書店、一九六七年）四二〇―四三八頁を参照。
（12）「出」字、前掲注（5）で示したテキストは「山」に作るが、これでは意味が通らない。おそらくは、「山」字は「出」字の一部が欠けたかたちが伝わったものではないか。今、李善注本に従って改める。
（13）曹林（譙王）は、儒者を厚遇し（『魏志』巻一三・王朗伝附王粛伝の裴松之注に引く『魏略』）、曹操が文を好む息子たちに与えた宝刀（『藝文類聚』巻六〇に引く曹操「百辟刀令」）を、曹丕、曹植とともに授かっている（『太平御覧』巻三四六に引く曹植「宝刀賦」序文）。また、かつて曹植とその文才を競った曹袞は、曹林の同母弟であり、死に際して後事をこの兄に託している（『魏志』巻二〇・武文世王公伝）。
（14）たとえば、嵇康「贈秀才入軍十九首」其二（『詩紀』巻一八）にいう「鴛鴦于飛、嘯侶命儔（鴛鴦　于に飛び、侶に嘯き儔に命ず）」は、曹植「名都篇」（『文選』巻二七）の「鳴儔嘯匹侶（儔に鳴じ、匹侶に嘯く）」、及び「洛神賦」（『文選』巻一九）の「命儔嘯侶（儔に命じ侶に嘯く）」を踏まえ、嵇康「贈秀才入軍五首」其三（『文選』巻二四）にいう「思我良朋、如渇如饑（我が良朋を思ふこと、渇するが如く饑うるが如し）」は、曹植「責躬詩」（『文選』巻二〇）の「遅奉聖顔、如渇如飢（聖顔を奉ぜんと遅ふこと、渇するが如く飢うるが如し）」を文脈ともに踏まえ、嵇康「琴賦」（『文選』巻一八）にいう「渉蘭圃、登重基（蘭圃を渉り、重基に登る）」は、表現上、曹植「離友」其二（『藝文類聚』巻二九）の「臨淥水兮登重基（淥水に臨み重基に登る）」を取り込んでいる。
（15）李陵・蘇武の名に仮託された五言詩にそうした事例が頻見する。このことは、かつて「漢代五言詩史上に占める蘇李詩の位置」（『中国文化』第六七号、二〇〇九年）で指摘した。
（16）たとえば、第三章で示した阮籍「詠懐詩」其十七の冒頭二句は、漢末の秦嘉「贈婦詩三首」其一（『玉台新詠』巻一）にいう「独坐空房中、誰与相勧勉（独り空房の中に坐し、誰か与に相勧勉する）」を踏まえたものである。このことは、かつて「他者の言葉を受けとめるということ―阮籍五言「詠懐詩」覚書―」（『季刊創文』二〇一三年春九号）で指摘した。

附記

本稿は、科学研究費助成事業・基盤研究（C）「中国中世初期における文学の質的転換に関わる研究」（課題番号：一九K〇〇三七六）の成果の一部である。

（県立広島大学）